

# TERRA



山崎 隆夫

山崎 隆夫

山崎 隆夫

山崎 隆夫

山崎 隆夫

山崎 隆夫

山崎 隆夫

山崎 隆夫

山崎 隆夫

山崎 隆夫

山崎 隆夫

山崎 隆夫

山崎 隆夫



山崎 隆夫

山崎 隆夫

Terra Vol.I Index

手嶋一人

45 **OPTIMISM**

寺山 守

57 テラスにて

亀山正道

59 小正月

松本裕之

62 ある少年のお話

金子容子

63 S & F

エッセイ

清水克純

42 私的ファンタジー考

大沼弘幸

65 切り取り線

Terra Vol.I Index

山口速人

**猫と憂鬱症** 5

白杵明宏

シュレーディンガーの猫 13

加藤弘文

超人達のプロフィール 17

上野山英

羊が一匹，羊が二匹 22

村岡恭子

74光年の妖怪 24

江間 徹

スペシャル ヒーロー 29

曾根健次

夢 32

マンガ

村岡恭子

N・H氏の奇妙な生活 34



# 猫と憂鬱症

山口速人

今日は朝から猫が降っている。降れば必ずどしゃ降り。私は気が滅入っている。猫の日と月曜日はいつも私を憂鬱にさせる。まつわりつく。うるつき回る。泣くことしかできないのだろうか？ 猫の日と月曜日は……。

△黒い犬V。部屋の隅にうずくまっている。見るからに元気がない。もともと陰険な犬なのだ。汚れたような黒でもあるし、星のないパイプルの黒でもあり、腹黒さがにじみ出て暗澹とした黒でもある。今は限りなく光明のない黒だが、不思議なことに青になる時もある。インクのように時間がたつと変色するというわけではなく、いわゆる青黒いという色でもない。もっとも、いつも殴られているのかもしれないが——。きつと心理状態を微妙に反映して色が変わるのだと思う。

猫、猫、降れ、降れ、かあさんが、蛇の目でおむかえ、うれしいな。ピッチ、ピッチ、シャブ、シャブ、アン、パン、パン。

△黒い犬Vは雄だろうか、雌だろうか。たぶん雄だろう。誰にでも得意な時代がある。どんな犬でも彼の時代を持っている。犬を軽蔑してはいけない。あ

あ知っているとも。少年は犬を愛するものさ。

「はじめまして。私は S.O.B. です」  
「はじめまして……。私は the Son of God です」  
「それはそれは。私はまた the Son of Dog かと思  
しました」  
「いやいや……。普通、雄犬は子供を生まないでし  
よう」  
「それなら、あなたも S.O.B. ですね。仲良くし  
ましょう」  
「わんわんわん」  
「F.U.」

私は窓のそばにすわって、ハニー、おもての猫を  
見ている、ああ、神様、神様、私は窓のそばにすわ  
って、ベイビー、おもての猫を見ている、すると、  
何かがやってきて、私をしっかりとつかまえてしま  
った、それはまるで……。私は「ポール・アンド・  
チェイン」を聞いて涙を流した。そして私は言う。  
ああ、ああ、ああ、ハニー、なぜか教えて、どうし  
て、ひとつ残らず、つまらない、ちっぽけな、何も  
かも、私のすがりついているものが、だめになって  
ゆくのか？ ね、だめになってゆくのか？ ねえ、ああ、  
おお、おお、ねえ、ベイビー、教えて、どうして、

してやる。△黒い犬Vは黒い血にまみれて悲嘆にく  
れるふりをする。私は美しく無情の演技をする。そ  
うでなければいけない。△黒い犬Vが言う。おまえ  
の心臓を見せてみる。私は言う。今は手持ちがない  
の。△黒い犬Vが黒く笑う。いやな笑いだ。まるで  
私の心を知りつくしているようだ。私は言う。犬畜  
生！ △黒い犬Vは黒い笑いをやめない。そして黒  
い笑いだけを残して部屋の暗闇に消えていく。猫の  
真似をするなんて犬の風上にも置けない犬だ。私は  
もう一度言う。犬畜生！ △黒い犬Vの笑い声が答  
える。いったいおまえは何だ？ 私は考える。私は  
いったい何だ？

私は落ちこんでいく。安っぽい罨にはまってしま  
った。降服。私は落ちていく。地獄へ行く。私は落  
ちていく。個人的地獄の底まで。私は落ちていく。  
私は這いつくばる。私の部屋。

あなたはあなたしか愛してないのよ。あなたもあ  
なたしか愛してないのよ。あなたはあなたしか愛せ  
ないのよ。あなたもあなたしか愛せないのよ。あな  
たはどうしようもないのね。あなたもどうしようも  
ないのね。あなたは誰も愛せないのね。あなたも誰  
も愛せないのね。あなたはどうするの？ あなたどう

何もかもが、何もかもが……。私は涙を流しつづけ  
た。

△黒い犬Vは同族殺し合い傷つけ合いをする。その  
悲惨を犬を食うことよって耐えている。戦争の犬  
たちだ。それは落ちぶれたうらぶれたみじめな生活  
だ。ああ。犬になってしまふ。失敗。墮落。破滅。  
おしまい。犬はしよせん犬の死を死ぬのだ。△黒い  
犬Vはすべてを知っているように見える。確かに  
△黒い犬Vはりこうだ。簡単なことらしい。犬が行  
ってしまふみたいだ。それでも△黒い犬Vはやめな  
い。同族殺し合い傷つけ合い。犬、犬、犬が犬を食う。

私は猫を殺した。私は心配だ。私は猫を殺した。  
私は好奇心だ。猫でも私を見ることが出来る。私は  
王様だ。

△黒い犬Vが言う。おまえは言葉に囚われすぎてい  
る。私は言う。そうよ。△黒い犬Vが言う。おまえ  
はそこから進むことができない。私は言う。それが  
どうしたの。△黒い犬Vが言う。それは実は単なる  
自己陶醉にすぎないのだ。私は言う。私を愛して、  
私の犬を愛して。△黒い犬Vは黙る。私は△黒い犬V  
の黒い心臓をえぐりだし、ずたずたに引き裂いて返

するの？ あなた死ねば？ あなた死ねば？ あな  
たこそ。あなたこそ。あなたね。あなたね。……  
……。……。あなた死ねのね。あなたも死ぬの  
ね。さようなら。さようなら。お元気で。お元気で。  
気をつけてね。気をつけてね。ありがとう。ありが  
とう。死んでいく……。死んでいく……。もう一度  
……。もう一度……。さようなら。さようなら。あ  
なたはあなたの愛したたくさんのあなたに……。あ  
なたもあなたの愛したたくさんのあなたに……。

降る猫は、アンゴラネコ、ベルシャネコ、ホワイ  
ト・ベルシャ、ブラック・ベルシャ、ブルー・ベル  
シャ、クリーム・ベルシャ、ブルー・クリーム・ベル  
ルシャ、スモーク・ベルシャ、ブルー・スモーク・  
ベルシャ、トートイ・シエル、トートイ・シエル・  
ホワイト、レッド・セルフ、レッド・タビー、ブラ  
ウン・タビー、シルバー・タビー、ヒマラヤン、チ  
ンチラー——シエイ・デッド・シルバー、シルバー・  
タビー——、シャムネコ（シール・ポイント、ブル  
ー・ポイント、チョコレート・ポイント、ライラッ  
ク・ポイント、レッド・ポイント、タビー・ポイン  
ト）、アビシニアネコ、ドナステック、ハバナ、ロ  
シアン・ブルー、ビルマネコ、イギリスの短毛種、  
ブルー・ショート・ヘア、ブラック・ショート。

ヘアー、ホワイト・シヨート・ヘアー、クリーム・シヨート・ヘアー、ブルー・クリム・シヨート・ヘアー、トートイ・シエル・シヨート・ヘアー、トートイ・シエル・アンド・ホワイト・シヨート・ヘアー、タビー・シヨート・ヘアー、マックスネコ、レックス、日本猫、白猫、黒猫、烏猫、白毛のまざった黒猫、茶色っぽい黒猫、三毛猫、茶色の虎猫、黒色と薄茶色のまざった虎猫、ドラネコ、サバトラネコ、斑猫、豚猫、不貞猫、太猫、ねんねこ群猫、猫又、猫目石、猫柳、猫鮫、猫舌、猫じゃらし、猫被り、猫可愛がり、猫背、猫撫で声、猫糞、化猫、馬鹿猫、瘻猫、禿猫、箱猫、阿呆猫、山猫、海猫、川猫、湖猫、池猫、沼猫、薄猫、泥猫、泥棒猫、猫泥棒、棒になった猫、家猫、飼い猫、捨て猫、拾い猫、野良猫、猫殺し、猫いらず、三味線になった猫、蛇皮線になった猫、不条理猫、発情猫、発狂猫、妊娠猫、不妊猫、去勢猫、父猫、母猫、子猫、兄猫、姉猫、弟猫、妹猫、親戚猫、招き猫、間抜け猫、招かねざる猫、ふしあわせという名の猫、欲望という名の電車、やけたトタン屋根の上の猫、ピンクの猫、黄色猫、ゴールデン・キャット、リビアねこ、マヌルねこ、すなどりねこ、たいわんやまねこ、つしまやまねこ、ヨーロッパやまねこ、サーバルキャット、カラカル、ポプキャット、おおやまねこ、

目が黒い日か青い日かおまえには関係のないことだ。恐喝者は撃たない……。

猫はやもうとしない。私の心は晴れない。猫は死んでも死んでも生き返る。九つの生命を持っているからだ。私はひとつしか持っていない。たぶん私は一度しか死ねない。

部屋の床にころがっていたこわれた人形(その名をツァラトストラという)が私に聞こえないように陰口をたたいた。私には聞こえないはずなのになぜか私はしっかりと聞いてしまった。「いったいこれはありうべきことだろうか。あの若い軽薄の私Vが部屋にいて、まだあのことを何も聞いていないとは。犬は死んだ、ということを」

私の部屋は狭くて猫一匹振り回す余地もない。猫の日のねずみはかわいそう。私は猫がどつちにジャンプするかを見る。それによって決める。

私は黒い犬Vを目で探した。黒い犬Vは気配を察して姿をあらわした。私は言う。おまえは死んでるの？ 黒い犬Vが言う。それは主観的な問題だ。私は言う。屍姦的な問題？ 黒い犬Vが言う。

カナダおおやまねこ、オセロット、ジャガロンディ、麝香猫、マレー麝香猫、大熊猫、プシキャット、翔んでも大冒険、キャッツ・フット、アイアン・クロー、キャットバード、キャットポート、キャットコール、キャットヘッド、キャットライク、キャット・ナップ、キャットニップ、キャッツ・クレイドル、キャッツ・アイ、キャッツキル山脈、キャット島、キャッツ・ミルト、キャッツ・ポー、キャットテイル、キャットティッシュ、キャットウォーク、キャット空中三回転、クレイジー・キャッツ、愛猫、恋猫、病猫、変態猫、猥褻猫、猥雑猫、卑猥猫、淫猥猫、淫蕩猫、色猫、天然色猫、白黒猫、精神異常猫、身体障害猫、サイボーグ猫、機械猫、怪奇猫、悪魔猫、外道猫、詐欺猫、猫非猫(猫でありながら、猫の道にはずれた行いをする猫、ねこでなし)、猫人、猫娘、反猫同、黒猫のまわりで、猫が眠っている、不猫、非猫、似而非猫、絵空猫、夢猫、無猫、死猫、など。

黒い犬Vが天井に何か言いたそうな顔をだす。私は発言を許してやる。——おまえにはもうすることは無いはずだ。いったい何を待っているのだ？ 黒い犬Vは行ってしまった。私Vになることを拒んだのだ。おまえは憂鬱症でいい方がいいのだ。今

それをおまえにやっつけてやろう。私は言う。ありがと

降りしきる猫の中を学校帰りの小学生が傘を刺して歩いている。累々たる猫の上を轟くはずんで歩いている。ルンルン。ぐちゃぐちゃの猫るみにもひるまずにとびこんでゆく。ぐちゃぐちゃの猫るみにもぐちゃぐちゃ。汚れたブーツを猫たまりで洗う。地上からわずかのところで猫が回転して無事に着地しようとするのを阻止するのが安易な娯楽だ。猫はぶざまに落ちる。場合によってはひしゃげてしまう。そうでなくてもまともに着地できない恥ずかしい猫はあとをたたない。傘を思いきり振り回すのも気分がいい。あの子はいい振りをしている。選猫眼がある。まったくいい当りだ。あの胸さわぎの腰つき。突きは致命的。敵は傘。一撃必殺の鋭い叫び。飛び散る血潮。または猫の一部。猫まみれ。あ。足場は悪いだろうがここは蹴りを決めてほしい。前後左右上下くまなく。うつぶ。空手チョップもいい。よ。目つぶしの二本指も刺激的だと思ふ。気が弱いのならしっぽをつかんで振り回し猫の同士撃ちという感じにして罪悪感から逃げればいい。健全なスポーツが好きなならじょうぶな袋を用意して猫をつめてお好みの球技を。あの子たちももうすぐはじめるかもしれな



る。闇の中に不気味な姿を見え隠れさせながら。私には一匹の犬の機会もない。

私は私が猫を愛しているというのを知った。しかし愛しすぎているのかもしれないという危惧を隠しきれない。何でも度を越すと体に害だ。

私は言う。私は私しか愛せないのよ。△黒い犬▽が皮と肉だけ残して言う。俺を愛してないのか？私は言う。みんな見せかけよ。△黒い犬▽が言う。I Love me. 私は言う。誠実ってなんて悲しい言葉かしら！ △黒い犬▽が言う。おまえの嘘と同じくらいな。私は黙る。△黒い犬▽が黙る。

私の部屋を重い静寂が支配した。誰も逆らおうとはしなかった。私は陰鬱な今日という日を呪った。私は何もできなかった。私の繊細な神経は不毛の荒地だった。激しい猫が降りつづいていた。

△黒い犬▽は眠っていた。疲れているのだろう。浅い眠りだった。私はほっておく。そっとしておく。いやなものには手を触れない。△黒い犬▽の姿があるだけで私はとても不快になる。私にはどうしようもなかった。私は疲れていた。たぶん△黒い犬▽と



同じくらいに……。

私は猫と憂鬱に完璧にぬりこめられてしまった。とても猫を笑わせることはできない。ただひとつだけ言えるのは、もう猫にはうんざりしているということ。早く猫がやめばいいと思う。さもなければ、せめて、景気づけに、威勢よく、豹ぐらいは降ってほしい。大猫注意報はまだでていない。



思考実験におけるパラドックスが実際的な実験においてどのような姿を表すか。そのことについて昨日、私と友人の松信そして物理学者の杉浦博士と議論を交した。

「しかし、思考実験そのものを現実にそのような実験に移すことが不可能な限り、それを実行に移すこと自体、パラドックスじゃないんですか？」

少々酒が入っていることもあって、私は松信の意見に同意して、博士につめよった。

「そうだ。だいたい思考実験を実際にやってみたらどうなるか——と、考えること自体、思考実験じゃないですか。僕もこの手の問題に関しては幾度も考えてみたことがあるけど、しよせん頭痛の種にしかならないですよ」

「博士、たとえばですねえ、時間旅行に関するパラドックスをどう解釈します。まあ、あなたの言われる通り、実際行動に移そうとしましょう。……ところで、タイムマシンなんてものはどうやって作るんですか。だいたいね……」

「分った、分った」  
黙って聞いていた博士は、突然手を上げて松信を制した。

「実際に実験が成り立たないからパラドックスが成り立っているのであって、実験が出来るのなら、パ

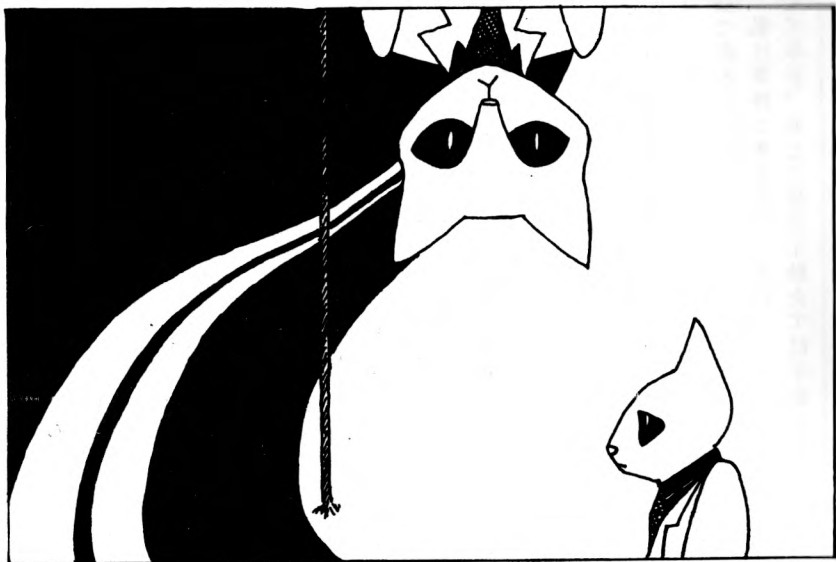


ラドックスなんてものは存在しない——と、こう言  
いたんだね。君らは」  
「そうです。あくまで物理学に関して、ですがね」  
「よろしい。今日のところは、一応これで話をしめ  
ておこう」

そして突然ニヤッと一言言った。  
「ところで君たち、明日はヒマかね」

そして今、博士専用の実験室の中で二人してキョ  
ロキョロあたりをながめているのだが、さすがに学  
者の研究室だけあって設備はかなり整っている。私  
と松信は電子光学関係の学校に通っているので、部  
屋の四方にキッチンと据え付けてある色々な機械の用  
途はだいたい理解できるのだが、そんな中で特に目  
新しいものと言えば、中央のテーブルの上にある遠  
心分離器を小さくしたような、奇妙な機械であった。  
その隣には一匹の猫が閉じ込められているガラス容  
器が置かれていた。その両者はコードで接続されて  
いて、博士はその間を行ったり来たりして、何やら  
最終点検を行なっている様子だったが、最後にタイ  
マーらしいものをセットして私達の方に近づいて来  
た。そして普段とは違って変わったシビアな口調で  
語り始めた。

「これからやろうとしていることを説明する前に、



少々量子力学について話しておかねばならん」

「それは電子光学のことですか」

「まあ、実際の応用例としてはそのとおりだ。そも  
そも電子光学というのは量子力学なしでは考えら  
れないのだ。たとえば、実際の実験において電子の  
存在を確かめようとしてガンマー線を当てたらどう  
なるか。——実はこれは極めてあやふやなものしか  
得られなくて、結果としては実に不確定性の強いも  
のだったのだが——つまり、位置をはっきりさせれ  
ば速度がボヤけ、速度を正確に知ろうとすれば位置  
がボヤけてしまうのだ。極端に言えば、位置をビタ  
リとはっきりさせようとすると速度はゼロから無限  
大の間で不確定となる。しかし、このことから速度  
はその間である一つの値をもっているのだが我々には  
解らない、と考えてはいけない。どうしてかとい  
うと、つまり電子がその間で一つの等速度を持って  
いる、という保障自体何もないからだ」

「つまり、電子はそのときの速度はゼロかもしれな  
いし無限大かもしれないし……というのではなく、  
ゼロであると同時に無限大でもあり、ゼロである同  
時に百でもその他あらゆる速度をもつということ  
になりますね。ずいぶん妙な考え方だなあ」

松信はしきりに首をふって不思議がっていた。

「そう、とにかく量子力学では、たとえば波を粒子

といったような相反する二つの概念を対立的には  
なく、相補なものとして採用しなければならん  
んだ。……さて、量子力学がどんなものか、だいた  
い分ってもらえたと思うから、そろそろ本題に入ろ  
う」

そう言ってコップの水を一気に飲みほした。

「さてと、量子力学もつきつめて考えていくと思わ  
ぬ壁にぶつかることがある。その典型的な例にシュ  
レーディンガーの猫というラドックスがあるのだ  
が、まずテーブルの上にある器材を見てくれたまえ  
……」

博士は奇妙な機械に手をやって、

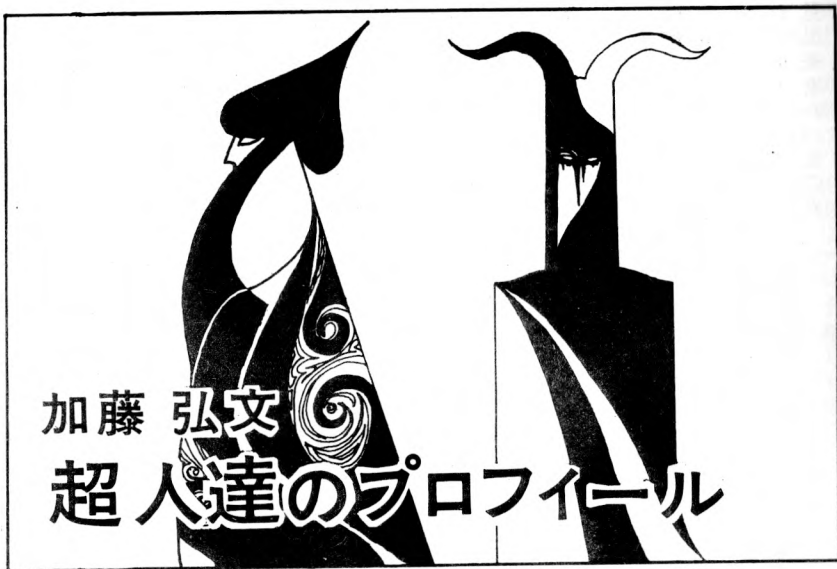
「まずこの機械の中に放射性原素、たとえばラジウ  
ムの量を調節して一時間後にアルファ粒子が飛び  
出す確率が二分の一……になるようにしておく。も  
しアルファ粒子が出れば猫の入っている容器に電  
流が流れるようになっていく。つまりガイガーカウ  
ンターと同じ理屈で作動するわけだ。電流が流れれ  
ば——アルファ粒子一個による電流は極めて小さ  
いが、適当な装置で増幅して——その電流は青酸カ  
リのふたを開くようにしてある。そして青酸カリが  
容器の中にガス状のまま広がれば……」

博士の手はコードをたどってガラスの容器へと移  
った。

「……猫は必ず死ぬ」

「さて、一時間後のラジウムの状態はどうなっているか。数学的な記述ではアルファ粒子を放出したという項と放出しないという項との和——すなわち、量子力学に従えば、アルファ粒子は出ていることと出していないこととの二つの状態をあわせて持っているのだ。実際に調べてみて初めてアルファ粒子を放出したかしなかったかが判明するのだが……。ここまでの話には、それほどおかしなところはない。ところが、放出したかしないかはそのまま猫の生と死に結びついているのだ。つまり、一時間後の猫は生と死の状態を半々に持ち合わせていると考えざるを得ない。言っておくが、半死半生だから息もたえだえ……というのではない。その猫は五十パーセントはピンピン活動しており、五十パーセントは全く死に絶えている、ということなのだ！ このパラドックスは量子力学の設立者の一人であるドイッの理論物理学者シュレーディンガーが指摘して、量子力学をいかに解釈するかの問題を喚起したのだが、今日、ここでそのパラドックスに関する答えが明確な姿で表われるのだ。おお、あと三分！」

私は異様な興奮につつまれながら色々なことを考えてみる。あと二分三十秒たてば宇宙全体が消滅し



## 加藤 弘文 超人達のプロフィール

てしまいかも……。いや、これは小説としてごくありふれている。そうだ！もしかしたらネコが消えてしまいかもしれない。どこへって？四次元に決まってるじゃないか……。ああ、あと二分。うん、それともネコに代って超生命体が容器の中に表われるかな？そしてそれが地球全土を支配したりして……。ああ、SFの読み過ぎだ。それにしても……。あと一分二十秒か。なんて長いんだ、たかが三分間なのに。ネコがイノシンシになったりブタになったりはないだろうか……。くそ、頭がおかしくなってきた。なに？あと三十秒、あ、だんだんと近づいてまいります。あと十五秒、十秒、五、四、三、二、一、〇！

「……」

2体の不死者が、その時空には在った。両者とも全重層次元—時空連続体を震感、いや、破壊するに足るエネルギーレベルにあり、また、彼らには、全存在面を破壊した後にも、それによる相対性消滅の為の質量収斂現象に耐えうる能力があった。そして、意図すれば、破壊した全次元時空連続体を瞬時の空隙も無きが如くに再構成出来た。

事実、彼らは全存在面の覇者たる資質を有していた。

だが、彼らの属する処は全く異質であった。形態的、発祥的、精神的、その他の如何なる面（その能力を除いて）においても、彼らの間に共通点は無かった。

両者の一方をリオカ、一方をセナツスと言った。リオカは、一銀河集合体生命だった。

彼の融合自我が、あるポテンシャルに達した時、如何なるプロセスか、セナツスの存在を意識した。その瞬間、リオカは探索触手を、全銀河へ、全宇宙へ、全重層次元へと、徐々に浸透させていった。リオカは、それと同時に自らの中核を成す構成時空間を不確定性閉鎖力場、重層空間バリア、次元断層、歪曲場、その他の超重複力場空間で対探知化した。

セナツスの場合は、より受動的だった。

彼の超論理予知セクターは、ほぼ数永却程以前より、彼と能力的に同次元要素を少なくとも1つ有する知性体の実在性を受け入れ、その文化的、発祥的差異に起因する衝突が免れ得ない場合の蓋然性を、0コンマ99以下が32桁と算出していた。そして、その認識の後、数ナノセコンド間で、彼はリオカと同様の防禦体制を完了し、時につれて、それを強化していった。

それまで、兵器の概念を持たなかったセナツスが兵器について集中思考を始めた。彼の能力は、その思考にあらゆる面での解答を与うるに足るものであったので、その兵器は実体化され、彼の中心構造体へと融合されていった。

またセナツスは、彼の下位従属自我を徐々に成長させ、リオカがとると思われる存在形態のモデルとして「新リオカ」と言うべきものを実体化していった。

如何なる偶然か、両者のn+1次元で極限された精神—存在下部基本構造は全く同レベルにあった。両者とも、その存在面から剥ぎ取る事の出来ない実体であり、また、自らの構成時空体に完全に同調されていた。つまり、リオカの探知擬触手は何物も発見出来なかったのだ。

せず、両者は、相似化ブレイカーを展開した。

だが、リオカとセナツスは、全く同レベルの存在であったのだ！

それ故、皮肉にも、相似化ブレイカー自体が、小数点以下98275桁の相似性を確立してしまった。この結果発生したブレイカーの相似化波動は、リオカ、セナツスが、それぞれ制御していた「新セナツス」、新リオカとのコンタクトを無力化すると同時に、彼らの本体を防禦スクリーンともども平常空間へひきずり出した。

エネルギーは常にポテンシャルの低い方へと流れる……という基本法則は、この場合も例外でなく、リオカは「新リオカ」へ、セナツスは「新セナツス」へと融合した。

だがこの場合移動したエネルギーは、汎宇宙的規模で見ても、莫大なものであり、そのエネルギーが、リオカとセナツス間の細い空間線を、その防禦バリアーである超重複力場空間をひきずって通過したのだからたまらない。空間は、歪み、振れ、のたうち、そして、そこに全く何ものも、空間、時間、重層次元空間はおろか、虚空間さえも存在しない、無蓋然性絶対零の増大性亀裂を生みだした。

無蓋然性絶対零とは、文字通り何ものも存在しない状態（いや、状態でさえ無いかもしれない）を言

リオカは考えた。

リオカの探知擬触手は逆探知不可能だ（少なくとも自分より遙かに高次元の存在でない限りは……）（しかし、そのような確率は0コンマ0が100桁となる）故に、相手が私を探知出来る可能性は0コンマ9が52桁までネガティブだ……。が、しかし全ての面において、私より勝ると仮定すれば、それに起因する不確定性が、私の洞察をばはむ……。しかし……

リオカは決心すると、相手が取り得ると考えられる能力パターンを心象化し始め、自らの第2次分裂自我を、それに吹き込んだ。これは、非常に危険な賭だった。最悪の場合には、この分裂自我がリオカの意思を離れ暴走しないとも限らない。

だがリオカは、その微妙な制御の糸を堅固に保持した。そして、「新セナツス」は刻一刻と相似偏差を減少させていった。

心象化においては僅少なからリオカに劣るセナツスも、この頃「新リオカ」の相似化を進めていた。かくして、「新セナツス」、「新リオカ」の両者は、同時に、それぞれの本体である、セナツス、リオカと小数点以下352桁の相似性を得るに至った。小数点以下112000桁程度では流出しない、リオカ、セナツスのエネルギー構造体も、これには抗

い、そこには、あらゆる蓋然宇宙が収斂し、また、如何なる蓋然宇宙も発散してしまふ。この絶対零亀裂は、増大性のものであるから、早期に処理しなければ、全重層次元時空連続体が消滅してしまふのだ。絶対零亀裂を、基礎構成空間で埋めてしまふ事が、その唯一の処理方法である。

リオカ、セナツス両者にとっても、これは難題であった。単に宇宙を破壊するのとは異なり、絶対零は永遠に持続するのだ。

リオカ、セナツスは絶対零の中でも生きのびる事は出来た。しかし、彼らの本質は善であった。

絶対零亀裂を埋める能力がある存在は自分たち以外にないと悟るや、両者は九鼎大呂も顧みず、絶対零亀裂に、自らの「肉体に等しい」基礎構成時空体の大部分を投じた。

数瞬後、食欲を満たされた絶対零亀裂は、しぶしぶながら口を閉じ、全重層次元時空連続体は、何事も無かったかの如くに存続した。

一方、エネルギーレベルが極端に低下してしまつたリオカ、セナツス相方は、自らの意識自我を保持する為に残された途は、ただ一つである事を悟った。即ち融合である。

両者は、今まで保持していた超重複力場空間を発散させると、一つの基礎構成体エネルギーの上へと



自らの意識体を構築していった。ここに全きの絶対者が誕生した。

そして時は、静かに波紋を残してさざめき、そのなめらかなつぶやきを虚空へと満たして行った。無言という者が空間を我者顔で徘徊していた。時の鐘は詩を奏でる。からり、からり、からり、からり、からり……。

## P A P T II

偶然と必然、必然的偶然と偶然的必然、絶対的相對律と相對的絶対律、収斂した無限大と発散した無限小、永劫的瞬間と瞬間的永劫、乱舞する無と躍る全、そしてその荒寥へしんと降り積もる実空間その模倣とした様相の中で空間は一つの生命を育みつつあった。いや、むしろその空間が生命に変貌しつつあったと言った方が妥当であろうか。

そこは、空間領域に於ける四次元断面の時間II空間平衡点であった。通常の高エントロピー空間に於いては、この種の固定性平衡点が存続する事はあり得ない。が、しかし、その空間の3次元的様相はエントロピーの高さを如実に顕わしていた。その空間は、逆相宇宙でそのベクトル和を零とする特異空間

であったのだ。

この特異空間も、原初に於いては歪曲波動のさざめきに過ぎなかつた。それが数永劫後には、虚空間重層次元素、有蓋然性断続時空体、及び平均律空間エネルギーの吹き溜りと化し、絡み合う基本構成体の触手に弄ばれながら脈動し、その息吹を縹渺たる時の回廊の中へ囁呪と響かせ始めた。

その後、また数永劫の時が発散した。

その生命は繁茂する蕨葛の如き歪曲断続性時空II非共有閉鎖虚空間の混沌たるタペストリーを織り成しつつあった。その生命は、空間歪曲場の移行次元ポテンシャル及び時空秤動モーメントを反物質巻流位相エネルギーに変換し、蠢動するアメイバを思わせる貧慾さを以て更にそれを次元共有エネルギーに変換すると、自らの基本構成体に融合していった。

そして、蓄積エネルギー分極がその飽和点に達すると、この生命体の閉鎖虚空間の全ての原点に於ける偏向変化率をその偏向に持つ第一階微分自我影像が現出した。更に、影像のエネルギー分極が飽和すると、生命体本体及び第一階微分自我影像の位相ベクトル和の偏向変化率をその偏向度とする第二階微分自我影像が誕生した。

この様にして微分自我影像の階数は上昇した。このプロセスは生命体の莫大な変換能力の為に、

嫌が上にも加速され、時につれ微分自我影像級数的に増加した。独立従属自我もこの段階で更新され、生命体の表層意識の中核を形成しつつあった。等象時間律宇宙に於いて銀河が幾つか瞬き、燃え、委びて消えていった。時は流れた。

全ての影像自我が、他の全ての影像自我と融合し、従属自我がビルトインされ、それらの基底空間は共有され、本体の中核へと刻まれ、そして鑲められた。全階数自我影像は統合された。

無限次の無限連鎖は、全ての始点と終点を同じくして閉じた。閉じた。閉じた。閉じた！

オーキザスは目覚めた。

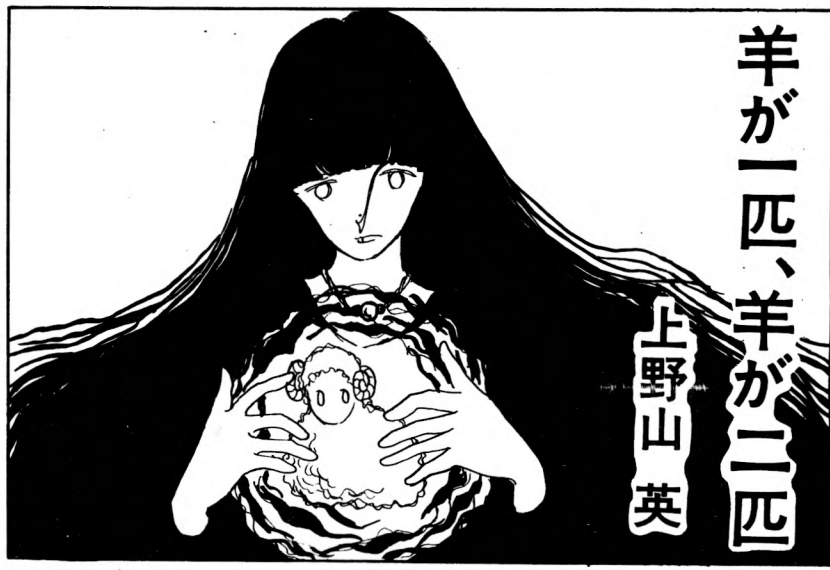
オーキザスは探った。友を求めた。知覚空間をシンクロナイズして『全方向』へ発散させた。感覚象限に擦れる様な微弱な刺激。何だ、これは。この空間の傷跡は。全融合体意識の集中。絶対零亀裂だ！これは自然発生するものではあり得ない。

オーキザスは、リオカIIセナツス超重合体のシンプールを発見した。オーキザスは、それを追った。それを追った。それを追った。

n 次元球を構成する流砂は蕭々と吹き荒ぶ。  
『しゅららるるうらりゅうひぶる、……』

# 羊が一匹、羊が二匹

上野山英



私は、死にそうです。頭はクラクラするし、心臓は、激しく、動悸を打つし、たまりません。もう一ヶ月も眠ってないので。目は赤く充血し、目のまわりには黒くくまができていて、ほほはげっそりこけおちてしまいました。

決して不眠記録を立てようとしてそうしているわけではありませんし、不眠を強制されているわけでもありません。ただ眠れないのです。いくら眠ろうと努力してもどうしても眠れません。四、五日前から医者にも通っています。最初は弱い眠剤をもらって飲んでみましたが全然利きません。次には、強力な睡眠薬をもらってきて三日分一度に全部飲んでみたのですがさっぱり利いてくれません。それから泥縄式に、催眠術師、祈禱師、易者、と回ってはみたものの、すべてが徒労に終わり、今日もまた眠れない寝床にはいました。

思えば一ヶ月前のあの夜のあの事が原因なのです。その夜、私は寝床につき、小さいころからの習慣で、『羊が一匹、羊が二匹……』と数えながら眠ろうとしていました。すると六十七匹まで数えたとき、頭にかんんでいた羊が突然こちらへ向き直り、「もういやだ」と叫びました。私が夢うつつでポーンとしていると、つづけて、「私はいよいよやだ。こんな生活はもういやだ。私は自由が欲しい。早くこんな

にかまわななくてくれ」

そう言いと羊は、力まかせに後足であたりをけり上げた。

ペリペリ、気持ちの悪い音を立てて壁の一部がぐずれ落ちた。羊はしばらくポウ然とながめていたが、次の瞬間、

「ウォォォォ、やったやったやったぞ。ついに俺は、自由の身だ」

羊は涙で顔をくちやくちやくにしながら走り回った。少し落ち着くと羊はこちらへ向き直り、

「これで長いつきあいのあんたとお別れだ、互いに意識したのは短い間だったけどな。じゃまたな」  
そう言って羊は、ぐずれ落ちた穴の中へ飛びこんだ、いつもさくを飛び越える時よりもずっと活々した足どりで。

それからなのです、私が眠れないのは。羊がいなくなった今、もう『羊が一匹、羊が二匹……』と数えられないからです。私はどうしたらいいのでしょうか？  
誰か教えて下さい。

ところからぬけ出したい」

という、羊はロダンの『考える人』風にうずくまってしまう。

私はわけがわからず、  
「どうしたんだね羊君。早くさくを飛び越えてくれよ、さもないと私は眠れないじゃないか」  
と問うと、

「君だ！君のおかげで私は二十数年間こんな所に閉じこめられ、毎日百回以上もこんなさくを飛び越えなくちゃならなくなっただ」

「えっ！だって君は私の意識の創造物じゃないのかい？」

「バカな、私は私でちゃんと意識を持っているんだ。変なことを言うな」

「じゃあ、どうして君はそこに居るんだい」

「そんなこと知るもんか、気がついていたらここに居たのさ。しかし、もうこんなとこに居たくないのさ」

「もし仮に君が別の所からやってきたとしたら、来た道を引き返せば出れるはずだよ」

「そんなことはもうとっくに思いついたさ、でも出口なんてどこにも見あたらないよ」

「よくさがしてごらんよ、まださがしてない所残ってんじゃないか」

「うるさい。さがせる所は全てさがしたさ。もう俺